

人文主義者のナチズムに対する傍観 —ヴェルナー・イエーガーの場合—

曾 田 長 人

序

本論は、「人文主義¹⁾者とナチズム——その抵抗・傍観・協調の類型をめぐる考察——」という研究課題²⁾の一環である。最初にこの課題の趣旨³⁾について簡単に述べておく。ドイツ第三帝国(以下、第三帝国と略)における代表的な人文主義者とナチズムの関わりを、抵抗・傍観・協調という3つの類型に大別する。そして両者の関わりの具体的なあり方、学問的・社会的な背景、両者の関わりに対する第二次世界大戦後の捉え方などを検討する。これによってドイツ・ヨーロッパの重要な文化的伝統である人文主義の明暗を、思想史的な視座から明らかにすることを目的としている。

本論はナチズムに対する傍観を代表する人文主義者の一人として、ヴェルナー・イエーガー(Werner Jaeger)を考察する。イエーガーは高名な人文主義者であり、彼がナチズムへの協調を試みた、という批判が行われてきた⁴⁾。この協調の試みという事実が誤っているわけではない。しかし本論は、イエーガーがナチズムを大勢として傍観した、と捉える。以下その理由を、彼によるナチズムへの関わり方の変遷を概観することによって説明し、本論の考察の視座を述べる。

イエーガーはベルリン大学古典文献学科教授として、いわゆる「第三の人文主義der Dritte Humanismus, Dritter Humanismus」の中心人物となる。「第三の人文主義」とは、主に1920年代から1930年代にかけてのドイツにおいて影響を揮った古典復興の精神運動である。イエーガーは、人文

1) 「人文主義Humanismus」とは多義的な概念である。本論において人文主義とは、「古代ギリシア・ローマの言語との取り組みを介して、人間や文化の形成を目指す精神運動」として理解する。

2) 謝辞を参照。

3) 詳しくは「人文主義者のナチズムに対する協調——リヒャルト・ハルダーの場合——」(東洋大学経済研究会『経済論集』第44巻2号、2019年) pp.165-166を参照。

4) Fuhrmann, Manfred: Die humanistische Bildungstradition im Dritten Reich, in: Humanistische Bildung, Heft 8, 1984, S.152、その他。

主義が同時代の実践や政治に寄与すべきことを説いた。1933年ナチ政権が成立するに及んで、彼は「第三の人文主義」に基づく古典語教育・古典研究がナチ政権と折り合うことを説明しようと試みた。しかしナチズムのイデオログにその協調の試みを批判され、ナチ政権から距離を取り始める。その後、イエーガーは同時代のドイツの政治状況について公の発言を控えるなど、ナチ政権の施策を傍観した。1936年シカゴ大学からの招聘を受け、ドイツを去った。

以上で概観したイエーガーとナチズムとの関わりにまつわる事実から、協調の試みと言えるのは1933年のごく短期間の出来事である。むしろ彼はその後ナチズムから距離を取り、ナチズムを傍観する姿勢に落ち着いたと考えられる。それゆえ本論においてはイエーガーとナチズムとの関わりを考察する際、傍観を中心に据えつつ、協調や距離への偏差も含めて検討することを予め断っておく。

論述の順序は以下のとおりである。まずイエーガーの出自、経歴、学問上の関心について整理する（第一章）。次に1920年代の4つの危機と、それに対するイエーガーとナチズムの対応を検討する（第二章）。さらにイエーガーによるナチズムへの協調の試みを、1933年の彼の著作と言行を手掛かりに考察する（第三章）。引き続き1934年から1945年にかけてイエーガーがナチズムへ次第に距離を置き、傍観に至る関わりを検討する（第四章）。最後に第二次世界大戦後のイエーガーによる著作を考察する（第五章）。

第一章 イェーガーの出自、経歴、学問上の関心⁵⁾

イエーガーは1888年、当時のラインラント、今日のノルトライン・ヴェストファーレンにあるロッペリヒで生れた。当地には（カトリシズム・）キリスト教の伝統が人文主義の伝統と調和して息づいていた⁶⁾。こうした精神的な土壌は、後のイエーガーの学者としての見解に影響を与える。高校卒業資格を優秀な成績で得た⁷⁾後、1907年の夏学期にマールブルク大学で古典文献学と哲学の勉学を始めた。当地で新カント学派の哲学者パウル・ナトルプ（Paul Natorp）が、イエーガーにプラトンへの関心を掻き立てた。一学期後、イエーガーはベルリン大学へ移り、同大学の著名な古典文献学者であるヘルマン・ディールス（Hermann Diels）の下で博士の学位を取得した。イエーガーの博士論文は、アリストテレスの『形而上学』成立史を主題とした。イエーガーは、同書の成立の様々な局面の時代的な相違、教授内容と概念的な構成の変化を明らかにした。これによって同書が、以前の研究が仮定したように統一的な構造からなるのではなく、様々な講演の組み合わせからなる

5) 第一章の説明は、Schadewaldt, Wolfgang: Gedenkrede auf Werner Jaeger 1888 - 1961, Berlin 1963, S.25-39を参考とし、拙論「ヴェルナー・イエーガーの「第三の人文主義」と、その根源」（東洋大学経済研究会『経済論集』第40巻1号、2014年）pp.128-130に手を加えたものである。

6) Jaeger, Werner: Zur Einführung, in: Scripta minora, Bd. I, Roma 1960, S.XXII.

7) Werner Wilhelm Jaegers papers, Box 47, in: Harvard, Houghton Library.

ことを証明した⁸⁾。こうした画期的な証明は専門家の間で高い評価を得、若きイエーガーに学者としての確固たる名声をもたらした。アリストテレスはその後イエーガーの関心を惹き、イエーガーは後年アリストテレス『形而上学』の定評ある批判的校訂版⁹⁾を刊行している。イエーガーは博士の学位の取得後、ドイツ第二帝国における代表的な古典文献学者であったベルリン大学教授ウルリヒ・フォン・ヴィラモーヴィッツ＝メレンドルフ（Ulrich von Wilamowitz-Moellendorf）の下で研究を行った。4世紀の新プラトン主義に属する古代ギリシアの教父、エメサのネメシオス（Nemesios von Emesa）に関する論文で教授資格を取得した¹⁰⁾後、イエーガーは1914年バーゼル大学古典文献学科の員外教授へ招聘された。古典古代におけるキリスト教の教父や神学に関する研究は、その後も断続的に進められ、第二次世界大戦後の彼の中心的研究テーマとなる。1915年、彼は正教授としてキール大学へ移った。1921年にはヴィラモーヴィッツ＝メレンドルフの後任としてベルリン大学へ招聘され、1936年に至るまで古典文献学の講座を担当した。このベルリン時代、彼は「第三の人文主義」に関する自らの構想を練り上げ、同時代のドイツの古典語教育・古典研究に大きな影響を及ぼした。1924年にはベルリンのプロイセン学術アカデミーの会員に選ばれ、1935年に至るまで『ギリシア医学集成』（Corpus Medicorum Graecorum）の刊行に携わった。当時、触発された古代ギリシアの医学への関心は、『カリュストスのディオクレレス』¹¹⁾（1938年）、『パイデシア』第2分冊冒頭の章「パイデシア¹²⁾としてのギリシアの医術」などに結実する。

1933年ナチスが政権を掌握した際、イエーガーは一連の言行によって自らの教養理念が新体制に適合することを説明しようと試みた。しかしナチズムのイデオログの理解を得られず、次第に第一線を退いた。かかる不如意な社会状況の下、ニュルンベルク人種法が制定され自らの二人目のユダヤ系の妻との離婚を迫られたこともあり、イエーガーは1936年シカゴ大学からの招聘を受け、妻子と共にドイツを去った。イエーガーがアメリカ合衆国へ移住した後も、彼の「第三の人文主義」はドイツの古典語教育・古典研究に隠然たる影響を持続的に及ぼした。

1934年から1947年にかけて、イエーガーの主著『パイデシア ギリシアにおける人間形成』¹³⁾（以下『パイデシア』と略）全3分冊が刊行された。1939年、彼はハーヴァード大学へ招聘され、1961

8) Jaeger, Werner Wilhelm: Studien zur Entstehungsgeschichte der Metaphysik des Aristoteles, Berlin 1912.

9) Aristotelis Metaphysica edidit W. Jaeger, Oxonii (Oxford Classical Texts) 1957.

10) Jaeger, Werner: Nemesios von Emesa. Quellenforschungen zum Neuplatonismus und seinen Anfängen bei Poseidonios, Berlin 1914.

11) Jaeger, Werner: Diokles von Karystos. Die griechische Medizin und die Schule des Aristoteles, Berlin 1938.

12) 古代ギリシア語で教育、文化、教養、形成などの意味。

13) Jaeger, Werner: Paideia. Die Formung des griechischen Menschen, Berlin 1934-1947, 3 Bde.. (第1分冊の翻訳は、拙訳『パイデシア ギリシアにおける人間形成（上）』[知泉書館、2018年]）

年の死に至るまで同大学で教鞭を執り、研究を行った。イエーガーはアメリカ合衆国に滞在した間、ドイツにいた時のように学派を形成することはなかった。そして1910年代に手掛けた教父研究を再び取り上げ、キリスト教の神学者ニユッサのグレゴリウス（Gregorius von Nyssa）の批判版全集¹⁴⁾の刊行を推し進めた。さらに『パイデア』の続編である『初期キリスト教とギリシアのパイデア』¹⁵⁾を刊行するなど、ギリシア思想がキリスト教神学の形成に際して演じた役割を主に研究した。1961年、ボストンで亡くなっている。

第二章 1920年代の4つの危機と、それに対するイエーガーとナチズムの対応

「第三の人文主義」は教育・学問上の運動であり、ナチズムは政治運動である。両者はそれぞれ目的を異にするため、両者の接点は1920年代、実際に希薄であった。しかしこの二つの運動はほぼ同じ時代のドイツにおいて展開を遂げ、1933年のナチスによる政権掌握という時代の転機にあって、教育・学問上の運動は政治運動を基礎付ける可能性を孕んだ。本章においては1920年代の4つの危機（Ⅰ）、その危機に対するイエーガーとナチズムの対応（Ⅱ）について、1910年代からナチ政権の成立にかけてのイエーガーの言行を中心に検討を行う。

Ⅰ. 1920年代の4つの危機¹⁶⁾

1. 学校教育上の危機

人文主義的な古典語教育は19世紀初期の新人文主義の時期に制度化され、ドイツの国民形成との関連下、大きなステイタスを誇っていた¹⁷⁾。しかし19世紀後期から実科主義、社会民主主義、ナショナリズムなどからの批判に曝された¹⁸⁾。その結果、古典語の授業時間数を段階的に削減し、人文主義ギムナジウムの卒業生による大学入学資格の独占を放棄するに至っていた。ヴァイマル共和制の下ではハンス・リッヒャート（Hans Richert）による文教改革が1925年に行われ、「文化理解を目的とする学科kulturkundliche Fächer」が中心に据えられた。その結果、古典語は古代の文化を理解する一手段とされるなど、古典語教育の周縁化が進んだ。イエーガーによれば、1920年代の中期「我々の（ドイツー引用者注。以下、引用文中のかっこは原則として引用者による）民族の最も強力な経済層、労働大衆、大資本は、よく知られた例外を除いて、我々の人間的な（人文主義）文化

14) Gregorii Nysseni Opera, Kritische Ausgabe, et al., Leiden 1959ff.

15) Jaeger, Werner: Early Christianity and Greek Paideia, Cambridge Mass. 1961. (ヴェルナー・イエーガー『初期キリスト教とパイデア』[野町啓訳、筑摩書房、1964年])。

16) 以下のⅠの説明は、拙論、前掲、pp.132-136に手を加えたものである。

17) 拙著『人文主義と国民形成 19世紀ドイツの古典教養』（知泉書館、2005年）。

18) 同上、pp.222-233。

の基礎に概して疎遠」¹⁹⁾ になっているのであった。

2. 学問上の危機

19世紀初期、新人文主義の古典文献学者であるフリードリヒ・アウグスト・ヴォルフ (Friedrich August Wolf) は、歴史学的な研究や事柄の知識に基づく新たな古典研究のプログラムを定式化した。このプログラムに基づいて大きな展開を遂げた歴史学的―実証的な古典研究は、従来、理想視されていた古典古代の古典性という規範の相対化を促した。こうした歴史研究による伝統的な価値の相対化という問題は神学、法学などの隣接諸学も巻き込み、いわゆる「歴史主義の危機」へ連なった。しかしヴィラモーヴィッツ＝メレンドルフのような指導的な古典文献学者はかかる危機に無自覚であり、歴史学的―実証的な古典研究を大成させた。彼は歴史学的―実証的な古典研究の帰結としての古典語教育の退潮にも、ほとんど無関心であった。

3. 社会政治上の危機

第一次世界大戦後に成立した民主主義的なヴァイマル共和国は、1920年代中期の相対的安定期を除けば政治的、経済的に不穏な状況を呈した。すなわち小政党の乱立によって政情は不安定であり、大インフレ、1929年の世界大恐慌の結果、古典教養の担い手であった中産市民の多くは窮乏に陥った。ドイツ人の多くは、ヴァイマル共和国は維持するに値しないという考えへ誘惑された。こういった中で、ドイツ共産党といった新興の政治政党が支持を広げつつあった。

4. 文化上の危機

野蛮な様相を呈した第一次世界大戦は、ヨーロッパ文明の進歩への信仰を揺るがした。ドイツ古典主義において重視された「人間性humanitas, Humanität」のような市民文化の理想像は、信憑性を失った。ヴァイマル共和国の時代、伝統的な価値の空隙を満たすべく、新たな（特に東方由来の）価値が脚光を浴びた²⁰⁾。しかし、ヨーロッパの伝統的な価値の本質を考え抜こうとした人もいた。オズヴァルト・シュペングラー (Oswald Spengler) は『西洋の没落 世界史の形態学の素描』を著し西洋の没落を予言し、第一次世界大戦後のドイツで多くの読者を見出した。世界市民主義は、かかる価値の動揺の一つの表れとして理解されがちであった。

II. 危機に対する対応

上で述べた1920年代の様々な危機に対して、イエーガーとナチズムはどのような態度を取ったのだろうか。イエーガーは人文主義な古典語教育・古典研究と同時代の社会・国家との関わりを反省

19) Jaeger, Werner: Antike und Humanismus, in: Humanistische Reden und Vorträge (1937), Berlin ²1960, S.103.

20) A.a.O., S.104. Jaeger, Werner: Die Antike im wissenschaftlichen Austausch der Nationen, in: Humanistische Reden und Vorträge, a.a.O., S.185. Jaeger, Werner: Die geistige Gegenwart der Antike, in: a.a.O., S.172.

し、ギリシア・ローマ古典古代や人文主義に関する従来の見方を刷新し、統一的なプログラムに基づく古典語教育・古典研究のルネサンスを試みた。こうした従来の人文主義を超え出る大きな期待ないし抱負は、彼を中心とする古典復興の精神運動の特徴付けとして用いられた「第三の人文主義」²¹⁾という呼称に表れていた。今日もなお、イエーガーについて論じられる所以である。

1. 学校教育上、学問上の危機に対して

学校教育上、学問上の危機への対応は連動していたので、以下、同じ節でまとめて記す。

学校教育上の危機に関して、イエーガーはベルリン大学教授としてプロイセンの文部大臣カール・ベッカー（Carl Becker）と懇意になり、同時代の文教政策に影響を及ぼすことを試みた²²⁾。他方、既成メディアへの働きかけ、新メディアの形成によって人文主義に有利となる世論の形成を図った。前者についてイエーガーは、1910年代から1930年代にかけてドイツの様々なギムナジウムや大学などで人文主義的な教養の重要性に関して多くの講演を開き、それを刊行した²³⁾。さらに彼は1920年代の後期から一般人が読む新聞にも、人文主義に関する4つの記事を発表している²⁴⁾。後者についてイエーガーは、新たに学際的な雑誌、すなわち『古代 古典古代の芸術と文化のための雑誌』²⁵⁾（以下『古代』と略）、ギリシア・ローマ古典古代に関する本を書評する『グノーモン 全古典古代のための書評誌』²⁶⁾（以下『グノーモン』と略）を創刊している。

学問上の危機に関して、イエーガーはパーゼル大学への就任演説「文献学と歴史学」において、古典文献学と歴史学という2つの学問の相違を精密にすることを試みた。彼によれば、文献学者は「理解Verstehen」、歴史学者は「認識Erkennen」を目指す。前者の理解は価値と関係し、後者の認識は因果関係的で時代的な事実の関連を明らかにするという。イエーガーは歴史学に古典的な歴史学は存在せず、古典的な古代学は古典文献学にのみ存在すると主張した²⁷⁾。このように19世紀から同時代にかけて支配的であった歴史学的・実証的な古典研究に対してイエーガーは、古典文献学という学問が（古代ギリシアという）価値を再建し新たな古典性を発見する可能性に言及していた。

1925年「ドイツ古典文献学者協会Deutscher Altphilologen-Verband」が結成された（イエーガーは

21) 14～16世紀のルネサンス期における第一の人文主義（古人文主義）、18世紀後期から19世紀初期にかけてのドイツ古典主義による第二の人文主義（新人文主義）に次ぐ第三の人文主義、という意味。この「第三の人文主義」という呼称は、1920年代初期から様々な文脈において用いられた。

22) Calder III, William M./Schrage, Martin: Der Briefwechsel Werner Jaegers mit Carl Heinrich Becker (1918-1932), in: Philologus. Zeitschrift für antike Literatur und ihre Rezeption, Bd.153, 2009, S.310-348.

23) 注19の本を参照。

24) 「ドイツ一般新聞Deutsche Allgemeine Zeitung」への寄稿。(Schadewaldt, W.: a.a.O., S.29-31.)

25) Die Antike. Zeitschrift für Kunst und Kultur des Klassischen Altertums. 1925-1944.

26) Gnomon. Kritische Zeitschrift für die gesamte klassische Altertumswissenschaft. 1925-.

27) Jaeger, Werner: Philologie und Historie, in: Humanistische Reden und Vorträge, a.a.O., S.10f..

同協会の創立時、副会長)。同協会は学校における古典語教師、大学における古典研究の専門家を主たる会員とし、学校教育と学問の架橋を目指した。同協会の努力は短期間のうちに実り、1928年には「古典文献学におけるほど、大学と学校の教師が共に属する場はない」²⁸⁾と謳われていた。

1930年にはイエーガーの呼びかけの下、「ドイツ古典文献学者協会」の主催による学術会議が開催された。同会議のテーマは「古典性という問題と古代」²⁹⁾であった。古典古代と関わる様々な分野の8人の発表者が、自らの研究する学科の立場から、このテーマについて講演、討論を行った。前のI.2で述べたとおり、19世紀に歴史学的・実証的な研究が盛んになった結果、「古典性」という概念は相対化され、外へ働きかける力を失いつつあった。イエーガーはこうした学校教育上、学問上の危機意識の下で、「古典的なもの」という概念について改めて議論を試みた。討議を経て新たに獲得された「古典性」という概念は、「第三の人文主義」に確固たる支えを提供すべきであった。

この学術会議によって、「古典性」に関する一般的な合意は得られなかった。しかしこのテーマは、人文主義にとって焦眉の問題として認識された。同会議後、「ドイツ古典文献学者協会」は『人文主義ギムナジウムのための古典語教授計画』³⁰⁾(1930年、以下『教授計画』と略)を発表した。この『教授計画』においては、イエーガーが以前の著作ですでに言及していた「教育者としてのギリシア人」³¹⁾「パイディア」³²⁾が、新たな古典性としてクローズアップされた³³⁾。かかる古典性の定式化は、言うまでもなく学問上および学校教育上の危機の乗り越えを意識したものであった。

ナチズムは、人文主義的な古典語教育の衰退に対して曖昧な態度を取っていた。「ナチズム Nationalsozialismus」という呼称には、人文主義的な古典語教育に批判的に対したナショナリズムと社会(民主)主義という2つの流れが合流している。しかしスパルタが人種主義などの模範として仰がれる³⁴⁾など、古代ギリシア・ローマ古典古代の価値は認められていた。ナチズムはその本質

28) Abernethy, Walther: Was ist heute der Deutsche Altphilologenverband, und welche Aufgaben hat er in der nächsten Zeit zu füllen?, in: Mitteilungen des Deutschen Altphilologen-Verbandes, Bd.2, 1928, S.2.

29) Das Problem des Klassischen und die Antike. Acht Vorträge der Fachtagung der klassischen Altertumswissenschaft zu Naumburg 1930, hrsg. v. Werner Jaeger (1933), Darmstadt²1961.

30) Altsprachlicher Lehrplan für das Deutsche humanistische Gymnasium, vorgelegt vom Deutschen Altphilologen-Verband, Berlin 1930.

31) Jaeger, Werner: Humanismus und Jugendbildung, in: Humanistische Reden und Vorträge, a.a.O., S.44.

32) 「ギリシア人が自らの精神文化の全体を性格付けた純然たる言葉であるパイディア παιδείαは、彼らの思考にとって文化と教育はある意味で同一であることを明確に意識させた」(A.a.O.)

33) Altsprachlicher Lehrplan für das Deutsche humanistische Gymnasium, a.a.O., S.12.

34) 拙論「ドイツ第三帝国におけるスパルタの受容(1)」(東洋大学経済研究会『経済論集』第43巻2号、2018年) pp.199-224、拙論「ドイツ第三帝国におけるスパルタの受容(2)」(同上第44巻1号、2018年) pp.1-30を参照。

において反知性主義的な運動であり、学問上の危機に大きな関心を寄せなかった³⁵⁾。

2. 社会政治上の危機に対して

ドイツの20世紀初期以前の古典語教育に対しては、それが美的で文学的な教養に片寄っている、知育偏重であるといった批判が行われてきた。イエーガーは、こうした批判の正当性を認めた³⁶⁾。そして同時代の社会政治上の危機を視野に入れつつ、プラトン³⁷⁾ やアリストテレス³⁸⁾ に依拠して個人の形成よりも国家への奉仕³⁹⁾、「人文主義は我々の政治世界の構築における支えとなる骨格である」⁴⁰⁾ ことを説き、指導者の教育⁴¹⁾ や国家倫理⁴²⁾ を重視した。その際イエーガーは、「アテナイの教養史をヴァイマル共和制の国民政治的な状況の批判的なモデルへと高め」⁴³⁾、同共和制に批判的に対した。彼は同時代の共産主義に対しても批判的であった⁴⁴⁾。1924年にイエーガーは「古代文化協会」を設立した（イエーガーは同協会の創立時、副会長。『古代』は同協会のいわば協会誌）。同協会は「現在の精神生活のため古代文化の学問的な認識を豊かにする」⁴⁵⁾ ことを謳い、学者のみならず「全

35) Sieg, Ulrich: Strukturwandel der Wissenschaft im Nationalsozialismus, in: Berichte zur Wissenschaftsgeschichte, Bd.24, 2001, S.256.

36) 「我々は、我々の若者から次のような指導者が成長することを望む。彼らは単なる学者や本の虫、技術者や専門家、文学者や審美家に棲けられるのではない。決然と立つこと、見ること、歩むことを通してギリシア人のあり方のあの最高の強さ、明晰な判断と思考、特殊における普遍の認識、過去に基づく現在の認識、公明正大な無私の目的へと教育される。全（ドイツ）民族は連帯して、かかる目的、精神の不滅の力への信仰を見上げる。」（Jaeger, W.: Humanismus und Jugendbildung, a.a.O., S.67.）

37) 「プラトンは文化の全体的な生の領域の構造に形式を与え、文化の全領域にとって中心的である。」（Jaeger, Werner: Platos Stellung im Aufbau der griechischen Bildung, in: Humanistische Reden und Vorträge, a.a.O., S.157.）

38) 「人間は国家形式で生きる本質、ζῷον πολιτικόνである。（中略）国家は人間よりも先に存在する」（Jaeger, Werner: Die griechische Staatsethik im Zeitalter des Plato, in: Humanistische Reden und Vorträge, a.a.O., S.89.）

39) A.a.O..

40) Jaeger, W.: Die geistige Gegenwart der Antike, a.a.O., S.162.

41) 注36を参照。

42) 「むしろギリシアの全ての倫理は、国家が古代ギリシア的な意味で存在する限りにおいて、おのずと国家倫理である。」（Jaeger, W.: Die griechische Staatsethik im Zeitalter des Plato, a.a.O..）

43) Mehring, Reinhart: Humanismus als «Politikum». Werner Jaegers Problemgeschichte der griechischen «Paideia», in: Antike und Abendland. Beiträge zum Verständnis der Griechen und Römer und ihres Nachlebens, Bd. XLV 1999, S.127.

44) 「近代の諸国民にとって、古代の人間性の思想とキリスト教以外に他の精神的な一致団結は存在しない。この統一の強さは、それがモスクワ（共産主義）やジュネーブ（国際連盟）のような単に抽象的な理念ではなく、我々の精神的で道徳的な思考形式の成長した歴史的な統一である点にある。」（Jaeger, W.: Die geistige Gegenwart der Antike, a.a.O..）

45) Einführung, in: Die Antike, a.a.O., Bd.1, 1925, S.1.

ドイツ語圏の教養世界」⁴⁶⁾から会員を募った。イエーガーは「(古典教養という)伝統の担い手であった比較的狭い市民層が存在しなくなった」⁴⁷⁾ことを嘆いていた。『古代』や『グノーモン』の創刊、「古代学術協会」の創設は、ギリシア・ローマ古典古代の愛好者の緩い結び付きを培い、周辺の存在となった教養市民の絆を再建するのみならず、彼らを核としたドイツの社会や国家の再建を射程に入れる試みであったと言える。上で述べた一連の試みは、古典語教育に対する批判——人文主義ギムナジウムは問題解決に寄与しない人物を作り出す——を骨抜きにすべき⁴⁸⁾であった。「人文主義は無条件に政治的な出来事である」⁴⁹⁾とは、人文主義が同時代の社会政治的な危機に対応する強い意欲を表している。

翻ってナチ党は1923年ミュンヘン一揆による政権奪取を試み、これに失敗した。同党は様々な社会政治上の問題の根源を第一次世界大戦でのドイツの敗戦に認め、ヴェルサイユ条約の破棄を唱えた。その際この条約を締結したヴァイマル共和制や、共産主義に批判的に対した。後にナチズムを代表する教育学者となるエルンスト・クリーク (Ernst Krieck) は、個人主義的な教育を批判し民族の全体へ向けた教育を説いた⁵⁰⁾。そもそもナチズムは、精神や思考の形成を重視する「第三の人文主義」とは異なり、身体や性格の形成を重視していた⁵¹⁾。

3. 文化上の危機に対して

イエーガーは第一次世界大戦における伝統的な価値の無力という経験を踏まえつつも、こうした価値を否定したのではない。彼は古代ギリシア人のあり方が最高の規範性を備えることを説いた⁵²⁾。そして人文主義という伝統的な価値の本質を考え抜こうとした。ここに、彼の思想の特徴である本質主義⁵³⁾、代用宗教性⁵⁴⁾が表れている。イエーガーはかかる立場に基づいて、古代ギリシ

46) A.a.O..

47) Jaeger, W.: Die geistige Gegenwart der Antike, a.a.O., S.166.

48) 「今日、古代へ向かう人は、次のような信仰を告白する。我々の人文主義は高度に、倫理的で実践的に考えられている」(A.a.O., S.168.)

49) A.a.O., S.162.

50) Krieck, Ernst: Nationalpolitische Erziehung, Leipzig 1932, S.9, 23f..

51) 文部科学・成人教育省による1935年3月27日の条例。s. Schneider, Barbara: Die Höhere Schule im Nationalsozialismus. Zur Ideologisierung von Bildung und Erziehung, Köln/Weimar/Wien 2000, S.123.

52) Jaeger, W.: Antike und Humanismus, a.a.O., S.110-112.

53) 「西洋の歴史の特別な意味と構造の原理としての文化の本質を熟考することは、必然的に新しい人文主義を含む」(Jaeger, W.: Platos Stellung im Aufbau der griechischen Bildung, a.a.O., S.124)、「人文主義は別の言い方をすれば、過渡的な文化現象ではなくヨーロッパ文化の継続的な構築原理である。」(Jaeger, W.: Antike und Humanismus, a.a.O., S.112.)

54) 「パイディア παιδείαの体系としての文化、この文化の器官としての純粋な形式というギリシア人の独創的な産物は、世界の諸民族にとって啓示のように見えた。かかるパイディアは、こうした諸民族の精神生活に

ア（の継承、人文主義）に基づくヨーロッパ文化の統一⁵⁵⁾を主張した。古代ギリシアとしばしば対立的に捉えられてきた古代ローマ、キリスト教の伝統も古代ギリシアの発展の下に位置付けられ、ヨーロッパという精神的共同体の構成要素とされた⁵⁶⁾。以上の特徴は、古典古代という規範を相対化する同時代の傾向と対抗的に捉えられていた。その傾向とは、人文主義的な古典語教育への直接の脅威であった「文化理解を目的とする学科」⁵⁷⁾、シュペングラーによるヨーロッパの格下げ⁵⁸⁾、東方やアジアへの関心⁵⁹⁾、世界市民主義⁶⁰⁾などである。

他方ナチズムは同様の文化上の危機に対して、優勝劣敗の原則に基づく社会ダーウィニズム的な人種主義に依拠した。すなわちナチスはアーリアないしはインドゲルマン人種を最優秀の民族と見なし、第一次世界大戦の戦場での苛烈な体験、同志愛を生の実相として捉えた。そして弱者への顧慮を人間性（への惑溺）の名の下に批判する⁶¹⁾一方、ドイツ民族（共同体）を至上の価値として崇めた。民族崇拜は本質主義的、代用宗教的な現象である。これらの特徴からナチズムは排外主義的で、少なくともその初期の段階において反ヨーロッパ的であり、世界市民主義、特にその担い手ともされたユダヤ民族を排斥した。

以上1920年代の4つの危機（Ⅰ）、危機に対するイエーガーとナチズムの対応（Ⅱ）について、1910年代からナチ政権の成立にかけてのイエーガーの言行を中心に検討を行ってきた。イエーガーとナチズムは同時代のヴァイマル共和制、共産主義、世界市民主義などに批判的な点において共通していた。しかし両者の相違は様々な危機の根源をどこに見るか、危機の克服が拠って立つ原理などにあったと考えられる。過去の伝統に縛られないナチズムは1920年代の出来事の中に、「第三の人文主義」におけるように）危機よりも、むしろ自らの政権獲得のチャンスを見たと言える。

おける空所を埋めた。」(Jaeger, W: Humanismus und Jugendbildung, a.a.O., S.47.)

55) 「ギリシア人はヨーロッパの精神世界に働きかける原理を発見したので、残りの民族の主人となった。」(Jaeger, W.: Humanismus und Jugendbildung, a.a.O., S.44.)

56) Jaeger, W.: Die geistige Gegenwart der Antike, a.a.O..

57) Jaeger, W.: Humanismus und Jugendbildung, a.a.O., S.52, 57.

58) Jaeger, Werner: Humanismus als Tradition und Erlebnis, in: Humanistische Reden und Vorträge, a.a.O., S.26.

59) 「我々の古いヨーロッパとの絆を内面的にも生き生きと保ち、東の力への安易な精神的な降伏に対抗して備えることこそ、現在のドイツの人文主義に課された最も重要な超国民的な課題である。」(Jaeger, W.: Die Antike im wissenschaftlichen Austausch der Nationen, a.a.O..)

60) 注44を参照。

61) Hitler, Adolf: 4. August 1929 “Apell an die deutsche Kraft”. Rede auf NSDAP-Reichsparteitag in Nürnberg, in: Reden, Schriften, Anordnungen. Februar 1925 bis Januar 1933, Bd. III /1, hrsg.u.kommentiert v. Bärbel Dusik u. Klaus A. Lankheit unter Mitwirkung v. Christian Hartmann, München/New Providence/London/Paris 1994, S.348. Rosenberg, Alfred: Der Mythos des 20. Jahrhunderts, München 1930, S.202f..

第三章 イェーガーによるナチズムへの協調の試み——1933年の著作と言行を手掛かりに

前章において検討したナチ政権成立以前のイェーガーの言行を踏まえ、1933年の彼によるナチズムへの協調の試みを以下、考察する。その際イェーガーによる「政治的な人間の教育と古代」(Ⅰ)、『パイディア』第1分冊(Ⅱ)の内容、これらの著作に対する反応(Ⅲ)を中心に検討してゆく。

1933年3月いわゆる授権法が成立し、ナチ党のヒトラーによる独裁政権が誕生した。人文主義者の多くは、この出来事を歓迎した。というのも、彼らは古典語教育・古典研究の周縁化から脱出する機会を、ナチ政権の成立の中に期待したからである⁶²⁾。ヒトラーが『我が闘争』において、人文主義的な古典語教育の理解あるいは容認と取れる言葉⁶³⁾を記していることも、彼らがナチ政権へ期待する一つの理由となった。

Ⅰ. 「政治的な人間の教育と古代」

多くの人文主義者の期待⁶⁴⁾を背にしてイェーガーは、ナチ教育の機関誌の一つとなる『生成の中の民族』1933年第1号の第3分冊(同年の7月頃に刊行)に、「政治的な人間の教育と古代」と題する小文を寄稿した。イェーガーは同年の4月頃、寄稿の委託を受け、短期間のうちにこの小文を著したことが推測されている⁶⁵⁾。『生成の中の民族』は、後にハイデルベルク大学学長となるクリーク⁶⁶⁾が編集主幹を務めていた。以下、「政治的な人間の教育と古代」の内容をまとめてゆく。

イェーガーはナチ政権の成立という出来事に鑑み、今後の教育を考える上で「古代の政治的で精神的な理想」⁶⁷⁾がドイツの民族性およびキリスト教と並んで重要であることを訴える。その際、彼はナチズムの側から人文主義へ寄せられた批判に言及する。この「ナチズムの精神史的な前提と折り合わないように見える」⁶⁸⁾人文主義の起源は「18世紀の西ヨーロッパ啓蒙の合理主義的な文化体

62) Neue Wege zur Antike. Humanistische Bildung im nationalsozialistischen Staate, Leipzig/Berlin 1933.

63) Hitler, Adolf: Mein Kampf. Eine kritische Edition, hrsg. v. Christian Hartmann, Thomas Vordermayer, Othmar Plöckinger, Roman Töppel, Bd. II, München 2016, S.1075.

64) 同時代の多くの人文主義者がイェーガーへ、自らの著作の抜き刷りなどを献呈していた。(Werner Wilhelm Jaegers papers, op.cit, Box53-55, 61-62.)

65) Rösler, Wolfgang: Werner Jaeger und der Nationalsozialismus, in: Werner Jaeger: Wissenschaft, Bildung, Politik, hrsg. v. Colin Guthrie King u. Roberto Lo Presti, Berlin/Boston 2017, S.65.

66) 彼が第三帝国において果たした役割については、山本尤『ナチズムと大学 国家権力と学問の自由』(中公新書、1985年) pp.132-145を参照。

67) Jaeger, Werner: Die Erziehung des politischen Menschen und die Antike, in: Volk im Werden, Bd.1, Heft 3, 1933, S.43.

68) A.a.O..

系」⁶⁹⁾、「個人の美的で形式的な自己形成」⁷⁰⁾の中にあるという。イエーガーは、そこに共同体の生との結合がなかったことを指摘し、その理由を「(18世紀末期の) ヴァイマル時代の我々の古典的なドイツ文化の全く非政治的な性格」⁷¹⁾に帰す。その後「歴史主義」の学問がかかる古代像を克服した。しかし「この学問は、古代の新しい認識から新しい教育的な意欲へ前進するに至らなかった」⁷²⁾。

イエーガーは「第三の人文主義」の発端を、第一次世界大戦以前の「学問の内部における運動」⁷³⁾に求める。それは「精神科学における「歴史主義」に対する戦いから生まれた」⁷⁴⁾。新しい人文主義の特徴は、古代の不滅で教育的、倫理的な力への注目にある。かかる関心が恣意的でないことは、プラトンが証している。彼は人間の教育を、あらゆる学問と哲学の最終的な目的にして意味と見なした。第一次世界大戦とその後の(ドイツ)崩壊の経験が、国家という問題への関心を高めた。

「第三の人文主義」は、「古代の人間は自らの歴史的な生のあらゆる決定的な局面において、政治的な人間であるという認識」⁷⁵⁾から出立する。ここでイエーガーは、クリークの『国民政治的な教育』から、クリークがギリシア人の教育上の重要性を説いた一節⁷⁶⁾を引用する。さらにイエーガーは、テュルタイオス、ソロン、ヘシオドス、ホメロス、悲劇詩人、トゥキュディデス、プラトン、デモステネスといったギリシアの詩人、歴史家、哲学者、弁論家を引き合いに出し、彼らが国家教育上の模範となることを特筆する(彼らについては、『パイディア』において詳説される)。

イエーガーは国家教育の模範として、ドイツよりもイギリスの人文主義教育に注目する⁷⁷⁾。翻ってドイツの大学においては、単なる専門家のあり方に対する対抗力が緊急に必要とされているという。そこでイエーガーは改めて、「古代の偉大な作品の記念碑的な精神形成」⁷⁸⁾に注意を促す。そして「文化理解を目的とする学科という誤った偶像」⁷⁹⁾に対してギムナジウムを守るべきことを説く。

以上まとめた主張の多くは、第二章において取り上げた1910年代からナチ政権の成立にかけてのイエーガーの言行の中にすでに含まれていた。ただクリークの著書の引用に、イエーガーによるナチズムへの機会主義的な迎合を認めてよいかもしれない。イエーガーは、ナチズムによる人文主義

69) A.a.O..

70) A.a.O., S.44.

71) A.a.O..

72) A.a.O..

73) A.a.O..

74) A.a.O..

75) A.a.O., S.46.

76) Kriek, E.: a.a.O., S.7.

77) Jaeger, W.: a.a.O., S.47.

78) A.a.O., S.48.

79) A.a.O., S.49.

に対する批判は、(彼自身も批判した、18世紀後期の新人文主義の系譜を引く) 美的で文学的で非政治的な人文主義に当てはまり、自らの実践的な「第三の人文主義」はむしろナチズムと響き合うことを主張する。こうしてイエーガーはナチズムに自らの人文主義観を提供し、人文主義の自己更新のためにナチズムとの共闘を訴えたかのごとくである。

II. 『パイデア』第1分冊

イエーガーの『パイデア』第1分冊は、1934年に刊行された。「序Vorwort」の執筆は1933年10月となっており⁸⁰⁾、この頃イエーガーが『パイデア』第1分冊の全体を脱稿したことが推測される。同書の「序文Einleitung」には、次のような一節がある。「しかし我々の全文化が自らの途方もない歴史的な経験によって揺るがされ、自らの基礎を吟味するに至った現在にあって、古代の研究は究極の、自らの運命を決定する問題として、古代の教育とは何かという問いに直面している」⁸¹⁾。ここでいう「自らの途方もない歴史的な経験」がナチ政権の成立を指しており、そう多くの読者に受け取られたことは、想像に難くない⁸²⁾。また『パイデア』第一分冊の末尾には、「民主主義によって土台を築かれたペリクレスの指導者としての立場とディオニュシオス(1世)による純粋に軍事によって支えられた単独支配の間を貫く道を見出すことが、近代の総統国家の目的となるであろう」⁸³⁾とある。ここでいう「近代の総統国家Führerstaat」とは第三帝国のことである。こうしてナチ政権の成立という時局の変化が、『パイデア』第1分冊の執筆に影響を及ぼしたことは、ほぼ確実である。以下、同書に表れたナチズムとのその他の関連について考察してゆく。

『パイデア』第1分冊の第1部は、古代ギリシアの^{アルカイック}前古典期を対象とし、『イーリアス』における戦闘の描写やスパルタの国制、歴史など、近代から見ると野蛮で残酷な古代ギリシアの面にも触れている。かかる面は、後にナチズムが好むところとなった⁸⁴⁾。スパルタの愛国詩人テュルタイオスに関する章においてはナチズムと同様、祖国への犠牲の死を讃えている。イエーガーは「人種Rasse」と関係した言葉を、1933年以前の著作においてしばしば用いていた⁸⁵⁾。彼はこれらのナチ的

80) Vorwort, in: Jaeger, Werner: Paideia. Die Formung des griechischen Menschen, Bd.1, Berlin/Leipzig 1934 (ページ数なし)

81) A.a.O., S.19f.

82) William M. Calder III/Maximilian Braun: «Tell it Hitler! Ecco!», Paul Friedländer on Werner Jaeger's *Paideia*, in: Quaderni di storia, vol.43, 1996, p.219.

83) Jaeger, W.: Paideia, a.a.O., S.511.この箇所についてフリートレンダーは、「これをヒトラーに言ってやれ！」(W. M. Calder III/M. Braun: op.cit., p.235)とコメントしている。

84) Apel, Hans Jürgen/Bittner, Stefan: Humanistische Schulbildung 1890-1945. Anspruch und Wirklichkeit der alttumskundlichen Unterrichtsfächer, Köln/Weimar/Wien 1994, S.266f., 314.

85) 『人文主義的な演説と講演』に収録された文章からだけでも、以下の箇所が挙げられる。Jaeger, W.: Der Humanismus als Tradition und Erlebnis, a.a.O., S.19, Jaeger, W.: Platos Stellung im Aufbau der griechischen Bildung,

な語彙を『パイデア』第1分冊において、21か所で用いている⁸⁶⁾。のみならず、ナチズムの依拠した「ギリシア人とドイツ人の人種上の親縁性」に言及している⁸⁷⁾。その他『パイデア』第1分冊においては「英雄主義」が肯定的に語られ⁸⁸⁾、最高級の表現が多用されている。これらはナチ的な表現の一つと見なされた⁸⁹⁾。さらに興味深いのは、イエーガーが人文主義の根幹をなす「人間性」について、次のように定義していることである。

「人文主義は「人間性humanitas」に由来する。この言葉は遅くともウァロとキケロの時代以降、より古く卑俗な意味と並んで、さらに第二の、より高い厳格な意味を持っていた。しかしここで前者の意味については考慮に入れない。この人間性という言葉はその第二の意味において、人間自身を本来の形、本来の人間存在へ教育することを性格付ける。これこそローマの大政治家が模範と感じた、ギリシア生粋のパイデアである。」⁹⁰⁾

「人間性humanitas」は多義的な言葉である。その主な意味としては、「1. 慈悲深い顧慮、特に慈愛、2. 機知に溢れ巧みな交際の流儀、3. 自然的で人間的な結合への感情、4. 教養ある人間存在、5. 文明」⁹¹⁾が挙げられる。「より古く卑俗な意味」は「1. 慈悲深い顧慮、特に慈愛、2. 機知に溢れ巧みな交際方法、3. 自然的で人間的な結合への感情」、「第二の、より高い厳格な意味」は「4. 教養ある人間存在、5. 文明」をそれぞれ指していると考えられる。そしてイエーガーはパイデアという言葉の下に、「人間性humanitas」の上の1～3（これは日本語の“ヒューマニズム”の含蓄とほぼ一致する）ではなく、4と5の「教養ある人間存在、文明」を意味すると明確に断っている⁹²⁾。

a.a.O., S.119f., 123, Jaeger, W.: Die geistige Gegenwart der Antike, a.a.O., S.161, Jaeger, Werner: Staat und Kultur, in: Humanistische Reden und Vorträge, a.a.O., S.209. s. Rösler, W.: a.a.O., S.73f.

86) Jaeger, Werner : Paideia. Die Formung des griechischen Menschen, Berlin/Leipzig ²1936, S.4f., 9. 24f., 67, 88, 99, 118, 139, 162, 261, 270f., 274, 365. (以下『パイデア』第1分冊は、原則としてこの第二版から引用する。)

87) 「しかしその（ドイツ人とギリシア人の）基本的な属性には、精神のあらゆる歴史的な変化と運命を貫いて奇妙にも不変のまま保たれる人種と民族性の、もっぱら感情的、直観的に把握できる契機が存在する。」(A.a.O., S.75.)

88) これは、ホメロスに関する冒頭の3つの章に顕著である。

89) 前者についてはVokabular des Nationalsozialismus (1998) , hrsg.v.Cornelia Schmitz-Berning, Berlin ²2007, S.308f., 後者についてはKlemperer, Victor: LTI. Notizbuch eines Philologen (1957), Stuttgart 2007, S.289-301を参照。

90) Jaeger, W.: Paideia, a.a.O., S.13f..

91) Storch, Helmut: humanitas, in: Der neue Pauly, Enzyklopädie der Antike, hrsg.v.Hubert Cancik u. Helmut Schneider, Bd.5, Stuttgart 2003, S.752-754.

92) Cf. Jaeger, Werner: The Future of Tradition, in: Our emergent civilization, planned and edited by Ruth Nanda Anshen, New York 1947, pp.176-177.

ところでナチズムが人間性を批判する場合、その標的は主として上の1～3の“ヒューマニズム”的な面に向けられた⁹³⁾。イエーガーは上で述べたような断り書きによって、自らの構想する人文主義がナチズムの批判対象となるのを避けようとしたように見える。

以上Ⅰ、Ⅱにおいて述べた、ナチ政権の成立に直接ないしは間接に触発された二つの著作を通して注目に値する点に触れたい。それはイエーガーが自らの人文主義を表現するのに、それまで自著において用いることのなかった「第三の人文主義」という呼称を明示的に用いていることである⁹⁴⁾。ここからも彼がナチ政権へ当初、期待や信頼を抱いていたことが窺える。

イエーガーによるナチズムへの協調の試みは、著作活動に留まらなかった。彼は1933年7月、「ドイツ古典文献学者協会」会長のエーミール・クロイマン（Emil Kroymann）と共にナチ政権の文部科学・成人教育大臣ベルンハルト・ルスト（Bernhard Rust）を訪問し、古典文献学者の関心を惹く問題について述べた。同年9月には新政権の成立に伴い、「ギムナジウムでの人文主義的な教養思想の新たな形成」の名の下に「ドイツ古典文献学者協会」の指導原理が書き換えられた。この書き換えの作業にはイエーガーも加わり、この指導原理の最後には以下の言葉が添付された。

「このドイツの人文主義的な教育は、本来の意味におけるドイツ的な事柄で、（人文主義という）同じ名称のあらゆる外国の形式から明確に区別されている。この教育は、世界市民主義や更新した異教のあり方と無関係である。この教育は、古代の種が似た（ギリシア・ローマ）諸民族との取り組みによってドイツ人の最善の力を呼び覚まし、かかる力を形成し、ドイツ人に自らの民族に結ばれたあり方をより堅固に与えることを約束する」⁹⁵⁾。

このような書き換えによって人文主義的な教育の目標は、従来のヨーロッパ的な次元からナチズムが説いた国民（ドイツ）的な次元へと移された。

Ⅲ. 「政治的な人間の教育と古代」と『パイデア』第1分冊への反応

「政治的な人間の教育と古代」と『パイデア』第1分冊に表れた、イエーガーによるナチズムへの協調の試みは、周囲の人々にどのように受け取られたのだろうか。

前者は、ナチズムのイデオログによって批判された。クリークはイエーガーの小論が発表され

93) Rosenberg, A. : a.a.O..

94) Jaeger, W.: Die Erziehung des politischen Menschen und die Antike, a.a.O., S.44. Jaeger, W.: Paideia, Bd.1, 1934, a.a.O., S.16.

95) Fritsch, Andreas: Die altsprachlichen Fächer im nationalsozialistischen Schulsystem. Zur Situation des altsprachlichen Unterrichts zu Beginn der nationalsozialistischen Herrschaft (1933-1936), in: Schule und Unterricht im Dritten Reich, hrsg.v.Reinhard Dithmar u. Wolfgang Schmitz, Ludwigsfelde 2001, S.141.

た『生成の民族』の次の号（1933年第1巻第4分冊）において、以下のように述べた。

「しかし我々（国家社会主義者）の目的は今回、初期ギリシアおよび初期ローマのポリス、その全体的な生の秩序、国家による躰、その英雄主義、その軍人的—政治的な教育体系へ向かわざるを得ず、後期の文学、学問、哲学的な方向へ向かうわけではそれほどない。あらゆる種類の人文主義は文学的、哲学的、美的、倫理的であった。我々（国家社会主義者）の教養は現実歴史的、国家的、政治的であるだろう——文学はそれを媒介する部分に過ぎない。精神史的にこのように確固と固定された「人文主義」という概念を、文学的・倫理的・美的なものから政治的・歴史的なものへと現実に非常に大きく変えることはできるだろうか？ 理想主義から民族的な現実主義へ組み替えることはできるだろうか？ それは難しい！」⁹⁶⁾

これは第一章のI.1「学校教育上の危機」で述べた、人文主義的な古典語教育に対する伝統的な批判を踏襲している。クリークは上の引用において、「文学的、哲学的、美的、倫理的」な人文主義に「現実的、歴史的、国家的、政治的」なナチズムの教養を対置している。そして前者のみならず、人文主義でありながらも現実的、歴史的、国家的、政治的であろうとするイエーガーの試みも否定している。つまりクリークは上の引用部の後半に表れているとおり、イエーガーによる人文主義の自己更新の試み（「第三の人文主義」）を認めなかった。イエーガーはクリークの中に、古代ギリシアへ関心を抱く「同志」を見出したかもしれない⁹⁷⁾にもかかわらず、クリークに自らの人文主義観を公の場で否定された。それゆえイエーガーのナチ政権への期待は、約三ヶ月しか続かなかったことが指摘されている⁹⁸⁾。ヴァルター・ルートヴィヒ（Walther Ludwig）は上の一連の経緯について、次のように述べている。「イエーガーはナチ支配の性格を十分に見抜くことなく、おそらく自らの個人的な影響の可能性を過剰評価して、英雄的—政治的な人間への教育という意味における人文主義に関する自らの見解が新時代に非常によく適合し、ギムナジウムが新国家における人文主義的で政治的な教養の場として適しているということを、証明しようとしたように見える。」⁹⁹⁾

次に、『パイデア』第1分冊に対するドイツ国内での反響に移りたい。

ハンブルク大学の古典文献学科教授ブルーノ・スネル（Bruno Snell）は、『パイデア』第1分

96) Krieck, Ernst: Unser Verhältnis zu Griechen und Römern, in: Volk im Werden, Bd.1, Heft 4, 1933, S.77.

97) Rösler, W.: a.a.O., S.66.

98) A.a.O., S.69.

99) Walther Ludwig: Amtsenthebung und Emigration Klassischer Philologen, in: Berichte zur Wissenschaftsgeschichte, Bd.7, 1984, S.168.

冊について長文の書評を著した。彼はナチズムに批判的であり¹⁰⁰⁾、彼の『パイデア』批判の視角は多岐にわたる。ここではナチズムと関わる論点についてのみ触れる。スネルは、イエーガーによる政治的なものという概念が不明瞭である点を衝く。つまりスネルによれば、政治的な「第三の人文主義」はきわめて一般的な国家志操を模範的と見なし、かかる国家志操について語ると、現実の国家あるいは要請された国家を考えているのか、区別がつかないという¹⁰¹⁾。「〔『パイデア』第1分冊において描かれたような）人文主義はまさに非政治的である。なぜならそれは政治に仕えず——あるいはまさにあらゆる政治に仕えるがゆえに——、常に言葉だけの営みに陥る危険にあるからである」¹⁰²⁾。こうした指摘はナチ体制下におけるイエーガーや「第三の人文主義」の一般的な展開を予示するものとして、第二次世界大戦後、高く評価された。イエーガーの兄弟子に当たり後にアメリカ合衆国へ亡命したユダヤ系の古典文献学者パウル・フリートレンダー（Paul Friedländer）¹⁰³⁾、その他のアメリカ合衆国へ亡命したドイツの人文系学者も、『パイデア』第1分冊に同書のナチズムへの近さがゆえに批判的なコメントを残していた¹⁰⁴⁾。

翻ってナチ党員の古典文献学者で、後にナチ党の働きかけでミュンスター大学教授となったヴァルター・エーバーハルト（Walter Eberhardt）も、『パイデア』第1分冊への書評を著した。彼は、同書にパイデアと人種や民族（共同体）との関連の掘り下げ方が足りないことを、批判した¹⁰⁵⁾。

こうして同書に対しては、反ナチズム、ナチズム双方の側から批判が加えられた。

第四章 1934年から1945年にかけてのイエーガーとナチズムとの距離、傍観的な関わり

イエーガーはナチ政権の成立に伴って当初、協調の姿勢を示した。しかしそれに対するナチズムの側からの批判を切っ掛けとして、ナチズムとの同床異夢から醒めてゆく。そしてナチズムから次第に距離を取り、傍観的な姿勢へと転じてゆく。その過程を第二次世界大戦の終了に至るまで、ドイツにいた時期（Ⅰ）、アメリカ合衆国にいた時期（Ⅱ）という二つの時期に分けて検討する。

100) Lohse, Gerhard: Klassische Philologie und Zeitgeschehen. Zur Geschichte eines Seminars an der Hamburger Universität in der Zeit des Nationalsozialismus, in: Hochschulalltag im »Dritten Reich«. Die Hamburger Universität 1933-1945, Teil II. Philosophische Fakultät, Rechts- und Staatswissenschaftliche Fakultät, hrsg. v. Eckart Krause, Ludwig Huber, Holger Fischer, Berlin/Hamburg 1991, S.794-798.

101) Snell, Bruno: Besprechung von W. Jaeger, Paideia (1935), in: Gesammelte Schriften, Göttingen 1966, S.52.

102) A.a.O., S.53f.

103) Calder, W. M./Braun, M.: op.cit., pp.211-248.

104) Rösler, W.: a.a.O., S.76.

105) Eberhardt, Walter: Humanismus im neuen Deutschland. Eine Auseinandersetzung mit Jaegers "Paideia", in: Die Deutsche höhere Schule, Bd.2, Heft 10, 1935, S.304.

I. ドイツにいた時期

イエーガーによるナチズムからの距離を具体的に表していると思われるのは、『パイデア』第1分冊第二版の刊行（1936年）に伴う書き換え、および『人文主義的な演説と講演』（1937年）に収録された論文の選抜である。

前者の『パイデア』第1分冊第二版に付された「第二版への序」において、イエーガーは「幾つかの見落としした箇所をこの（第二版の刊行という）機会に訂正することができた」¹⁰⁶⁾と記している。実際にどの箇所が訂正されたのか同書の初版と第二版を比較すると、イエーガーが初版で自らの人文主義を「第三の人文主義」と名付けた箇所は第二版では「未来の人文主義」¹⁰⁷⁾へ変えられ、注83で引用した「総統国家」に関する箇所が、第二版において削除されていることなどがわかる。後者の箇所は、イエーガーの「第三の人文主義」がナチ国家の歩むべき方向を指南しているように読め、これがナチ政権を刺激するのを恐れたのであろう。

後者の『人文主義的な演説と講演』には、1914年から1934年にかけてイエーガーが一般人向けに行った演説や講演、発表した文章などが収録されている。しかし一般人向けにこの時期に刊行されながらも、同書に収録されなかった論文が2つある。それは、「政治的な人間の教育と古代」および「国家と文化」である。「国家と文化」は1932年に行われた講演が基になり、同年発行の『古代』に当初、収録された¹⁰⁸⁾。本講演において人文主義の依拠する普遍的な人間性は、ナチズムの依拠する「人種」と明確に対立的に捉えられている¹⁰⁹⁾。さらにイエーガーは、次のようにも記している。

「精神が普遍的なものを目指す傾向は国民文化の土台の上においても、常に実際の国家との闘争に導きかねない。いかなる文化も、それがどんなに深く民族のあり方に根付いていても、自らの思考によって国の境界で留まることはできない。文化の中には生まれつき、普遍的なものへの萌芽がある。なぜなら文化と人間性は、そもそも同義の概念だったからである。精神を自らのプログラムへ縛り付け、それを単なる手段として役立てようとする国家のあらゆる試みは、文化から活力を奪い、文化的な助力も国家に価値なきものとする。」¹¹⁰⁾

ナチ政権は成立直後、「職業官吏再雇用法」の施行によってドイツの大学からユダヤ系、政治的に信頼できない教員を免職し、また焚書を行うなど、思想や文化の統制に乗り出していた。「文化と国

106) Vorwort zur zweiten Auflage, in: Jaeger, W.: Paideia, ²1936, a.a.O.. (ページ数なし)

107) Jaeger, W.: Paideia, a.a.O., S.16.

108) Jaeger, Werner: Staat und Kultur, in: Die Antike, Bd.8, 1932, S.71-89.

109) Jaeger, W.: Staat und Kultur, in: Humanistische Reden und Vorträge, a.a.O., S.209.

110) A.a.O., S.212f..

家」はナチ政権の成立以前に著されたが、ナチズムによる「精神をプログラムへ縛り付け（中略）ようとする国家のあらゆる試み」に対して、イエーガーは批判的たらざるを得なかったと思われる。

彼は、「政治的な人間の教育と古代」と「文化と国家」を『人文主義的な演説と講演』へ収録しなかった。その理由は、前者についてはナチズムの協力者と見なされるのを避けるため、後者についてはナチ政権との衝突を避けるためであったと思われる。しかしこの2つの論文を同書に収録しなかったことは、ナチ政権への距離を目利きに示す点で共通していた。

イエーガーは「政治的な人間の教育」を説いたにもかかわらず、現実政治の体系や状況には不案内¹¹¹⁾で、明確な政治的な信条といったものは持たなかったように見える。彼はキールでのドイツ革命（1918年）後、「ドイツの将来は、社会民主主義にかかっている」¹¹²⁾と記した。にもかかわらず後に、同党が重要な役割を演じたヴァイマル共和制に批判的な立場へ転じた。15年後、彼は当初ナチズムに期待し、その後、距離を取った。ベアト・ネーフ（Beat Näf）によれば、「ドイツで誰が権力の座に就いて、文化と教養が誰に仕えるかということは、そもそもイエーガーの関心を大して惹かなかった。古代への配慮が、彼には決定的であった」¹¹³⁾。

イエーガーは1934年、カリフォルニア大学のパークレー校でサザー客員教授として教鞭を執り、アメリカ合衆国の各地に数か月、滞在した。こうしてアメリカ合衆国の大学との結び付きが強まったことから、彼が後の移住へ向けた準備を行い始めたことが窺える。

1936年8月、彼はシカゴ大学の招聘を受けベルリン大学を去ることが正式に決定した。イエーガーはベルリン大学教授という公務員であったので、移住するためには政府の許可が必要であった。ナチ政府の担当局へ提出した移住の請願書の中でイエーガーは、移住の理由としてシカゴ大学への自らの赴任の中に、「（前略）アメリカの精神科学に改めてより深い影響を及ぼす類まれなチャンスという意義を認識します。これは私には、アメリカの学問的な重要性が増大するのを前にして、ドイツ精神の国際的な威信にとってきわめて重要な事実に見えます」¹¹⁴⁾、つまり一種の国威発揚のためと記している。これはナチ政府にとって、受け入れやすい移住の理由であったろう。かかる理由付

111) Flashar, Hellmut: Werner Jaeger und das Problem der Bildung, in: Gymnasium. Zeitschrift für Kultur der Antike und humanistische Bildung, Bd.122, 2015, S.420.

112) 1918年12月20日ヨハネス・シュトゥルクス(Johannes Stroux)宛ての手紙 (Mensing, Eckart: Über Werner Jaeger und seinen Weg nach Berlin, in: Nugae zur Philologie-Geschichte II, Berlin 1989, S.70)。

113) Näf, Beat: Werner Jaegers *Paideia*: Entstehung, kulturpolitische Absichten und Rezeption, in: Werner Jaeger reconsidered. Proceedings of the Second Oldfather Conference, held on the campus of the University of Illinois at Urbana-Champaign, april 26-28, 1990, edited by William M. Calder III, Atlanta 1991, S.146.

114) Obermayer, Hans Peter: Deutsche Altertumswissenschaftler im amerikanischen Exil. Eine Rekonstruktion, Berlin/Boston 2014, S.29.

けのためか、イエーガーの退職に際してはドイツにおける彼の今までの学問的な貢献をねぎらうヒトラーとゲーリングの署名入りの謝辞が入った証明書が送られた¹¹⁵⁾。異例なことに、イエーガーはアメリカ合衆国へ移住した後も、ナチ政権下のドイツで著書の刊行を許された。アメリカ合衆国でイエーガーがナチズムへ傍観的な姿勢を保ったのは、ナチ政権下のドイツで著作を刊行する余地を残しておくためでもあったろう。こうしてイエーガーのシカゴ大学への赴任は、亡命ではなかった。

イエーガーのドイツ政府に対する移住の理由付けがいわば外向きの顔であったとすれば、彼は自らの弟子にはアメリカ合衆国へ移住する理由として異なることを語っていた。イエーガーは彼らと惜別する際、次のように挨拶したという。「我が友よ、私を「裏切者αὐτόμολος」と思わないでほしい。皆さんご存知のとおり、ドイツのここベルリンで私はとても長い間、大きな喜びを抱いて教壇に立ち、豊かな成果を上げた。しかし自らと自らの目的に忠実であろうとするならば、ナチ政権の下ではもはや活動できない。」¹¹⁶⁾ こうしたイエーガーによるナチ政権への外交的な配慮、否、面従腹背的な姿勢は、ナチ政権の文教治安担当者にも気付かれていた。1941年12月6日付の文化政治情報（秘）には、「ヴェルナー・イエーガー教授の作品は、きわめて慎重に取り扱い、言及すべきである。取り扱いや言及の際には、雑誌局、文化報道局と事前に協議することが望ましい」¹¹⁷⁾ とある。

II. アメリカ合衆国にいた時期

「イエーガーはアメリカ合衆国において、自ら意図したにせよしなかったにせよ、象牙の塔に引きこもった」¹¹⁸⁾。彼がアメリカ合衆国において最初に発表した論文は、「ギリシア人とユダヤ人」である。この論文の中には、イエーガーによるナチ政権への距離と解釈できる箇所がある。すなわち彼によれば、「こうしてモーセの国制は、勇敢さと規律に関してスパルタ国家と似ていた」¹¹⁹⁾ という。これはスパルタを理想視し、ユダヤ民族を排除したナチズムにとって不都合な指摘であった。

1939年には『デモステネス 大政治家とその成長』が刊行された。本書は1932年にイエーガーがスコットランドの聖アンドルーズ大学で行ったギフォード講義が基になっている。イエーガーは本書の成立にナチ政権の成立という時代的な影響がないことを、ことさら断っている¹²⁰⁾。本書におい

115) A.a.O..

116) Götte, Johannes: Werner Jaeger (1888-1961), in: Eikasmos, Bd.4, 1993, S.221.

117) Losemann, Volker: Nationalsozialismus und Antike. Studien zur Entwicklung des Faches Alte Geschichte 1933-1945, Hamburg 1977, S.43, 204.

118) Wesseling, Klaus-Gunther: Werner Jaeger, in: Biographisch-bibliographisches Kirchenlexikon, bearbeitet und herausgegeben v. Friedrich Wilhelm Bautz, Bd.18, Herzberg 2001, S.725.

119) Jaeger, Werner: Greek and Jews, in: Scripta minora, Bd. II, a.a.O., S.183.

120) Jaeger, Werner: Demosthenes. Der Staatsmann und sein Werden, Berlin 1939, S.1.

て彼は、「デモステネスという男の道徳的な悲劇は、時代の政治的な出来事よりも多くの関心に値する、と議論する」¹²¹⁾。ウィリアム・M・コーダー 3 世 (William M. Calder III) は、「どの程度イエーガーのデモステネス像は、イエーガー自らの苦境の自画像だったのか」¹²²⁾ と問うている。

シカゴ大学への赴任後、第二次世界大戦の終了に至るまで、イエーガーが主として打ち込んだのは『パイデシア』第 2、第 3 分冊の執筆である (前者は英語版が1942年、ドイツ語版が1944年、後者は英語版が1944年、ドイツ語版が1947年に刊行)。同書の第 2、第 3 分冊の英語版とドイツ語版の間には、章の順番が変わるなどの異同がある。以下、ナチ政権の成立とほぼ軌を一にして刊行された『パイデシア』第 1 分冊と、その後、主にアメリカ合衆国において記された『パイデシア』第 2、第 3 分冊の間の、叙述の傾向の変化について考えてみたい。

イエーガーは『パイデシア』第 1 分冊において、ホメロスからトゥキュディデスに至るまで「ギリシアの歴史を鏡とした、現実の国民政治的、「国家倫理的な」問題の検討」¹²³⁾ を目指した。つまり当時、著されたギリシアの古典作品や史実が主として都市国家^{ポリス}の教育や政治にどのように影響したか、論じている。これは、「第三の人文主義」における「政治的な人間の教育」に即した問題関心である。イエーガーは人間の意識的な教育を目指したソフィストを評価し、プロタゴラスの「万物の基準は人間である」という言葉に注目する。しかし彼らは、「国家と精神の緊張」という問題を解決できなかったという。この問題の解決はプラトンによって行われ、「万物の基準」は「人間」から「神」(プラトン『法律』)へ転回を遂げた、という。かかる転回に至る記述が、『パイデシア』第 2、第 3 分冊の主たる内容をなしている。これについてラインハルト・メーリング (Reinhard Mehring) は、「人文主義が果たすべき国家倫理的な機能の信用を自ら失わせることは、“神中心的な”転向に帰結する」¹²⁴⁾ と解釈する。さらにイエーガーは『パイデシア』を執筆する際、「自らの問題設定を教養理論的な基礎付けから (人文主義とキリスト教の) 歴史的な連続性の証明へずらし、これと関連して自らのプログラムの期待を弱めたことを明確に定式化していない。これはイエーガーの浩瀚な作品の根本的な弱点である」¹²⁵⁾ と指摘している。『パイデシア』の最終章は、デモステネスを取り扱っている。彼は都市国家^{ポリス}を母体としたギリシアの国民的な統一を目指しながらも、挫折せざるを得なかった。イエーガーは、デモステネスの挫折がなければ神中心的な転向は必要なかった、と言いたかったのだろうか。デモステネスに関する章は、イエーガーによる神中心的な転向を

121) Calder III, William M.: Men in Their Books. Studies in the Modern History of Classical Scholarship, edited by John P. Harris and R. Scott Smith, Hildesheim/Zürich/New York 1998, p.139.

122) Op.cit..

123) Mehring, R. : a.a.O., S.115f..

124) A.a.O., S.126.

125) A.a.O., S.126f..

歴史的に正当化するため、『パイディア』の最終章に配置されたようにも見える。

1939年イエーガーはハーヴァード大学の招聘を受け、シカゴ大学から同大学へ移った。ハーヴァード大学で彼に師事したコーダー 3 世によれば、「イエーガーは同時代の出来事に関心を持たず、全く非政治的であった。彼は一度ゼミで、第二次世界大戦のことを『ラテン語大辞典』¹²⁶⁾ 編纂の進展を遅らせた小さな出来事である、と語った」¹²⁷⁾ そうである。この言葉には、イエーガーのナチズムへの一種、非人間的とも言える傍観的な姿勢、それと裏腹のヨーロッパ古典文化への深い傾倒がはっきりと表れている。こうした態度の結果と言うべきか、ハンス・ペーター・オーバーマイヤー (Hans Peter Obermayer) がハーヴァード大学に保存されているイエーガーの遺稿を読んだ印象では、「イエーガーは他の人と比べて (ドイツからの亡命者を) 助けることが稀であっただけでなく、イエーガーに敢えて助けを求めようとしたドイツからの亡命者は、比較的、僅かしかいなかった」¹²⁸⁾。

イエーガーなき後のドイツにおいて、「政治的な人間の教育」という彼の構想は全く意味を失ってしまったのだろうか。そうではない。第三帝国の下において、「第三の人文主義」とナチズムとの確執は続いた。同帝国を代表する教育哲学者となったアルフレート・ボイムラー (Alfred Baeumler) は「人文主義をめぐる戦い」(1937年)において、ナチズムによる人文主義の伝統からの解放を、ヨーロッパ諸民族をまとめる最後の共通の伝承(「第三の人文主義」)に対する攻撃と同一視した¹²⁹⁾。そして「第三の人文主義の後に第四の人文主義が作り出されようとも、ドイツの精神的な力はナチズムであることに変わりはない」¹³⁰⁾ ことを断り、「それゆえナチズムは、人文主義と新人文主義によって媒介されない、人種概念から生じたギリシアのあり方への直接的な関係である」¹³¹⁾ ことを強調した。ボイムラーは、ナチズムが「第三の人文主義」と重なる面を持つがゆえに、両者の相違を強調せざるを得なかったのかもしれない。古典文献学者のハンス・ドレクスラー (Hans Drexler) も1940年『第三の人文主義 批判的なエピローグ』¹³²⁾ と題する本を刊行し、「第三の人文主義」を批判した。

126) Thesaurus Linguae Latinae. ラテン語のあり方を、起源からロマンス語の姉妹言語に分かれる (セヴィリャのイシドールス [600年頃]) まで収録。未完結。1893年ドイツ語圏の5つのアカデミーが共同作業を開始。第1分冊が1900年に刊行。ラテン語、ラテン文学を研究する確固とした基礎になることが目指されている (https://de.wikipedia.org/wiki/Thesaurus_Linguae_Latinae)。

127) Calder III, W. M.: Men in Their Books. op.cit, p.289.

128) Obermayer, H.P.: a.a.O., S.24f..

129) Baeumler, Alfred: Der Kampf um den Humanismus, in: Politik und Erziehung. Reden und Aufsätze, Berlin 1937. S.57.

130) A.a.O..

131) A.a.O., S.64.

132) Drexler, Hans: Der dritte Humanismus. Ein kritischer Epilog, Frankfurt am Main 1942. 彼は1942年にあってなお、「第三の人文主義が根こそぎ断たれたと信じるのは、宿命的な誤謬であろう」(A.a.O., S.10) と記している。

スネルは『パイディア』第1分冊の書評の中で、次のように記していた。「本質的なことは、古代が直接的に模倣へ向けて熱狂させ、自ら行為せざるを得なくしたことである。(ドイツ古典主義の) 美的な人文主義は、芸術的な行為によって自らの価値を証明した。これと同様、(イエーガーの) 政治的で倫理的な人文主義は、政治的な投入、つまり行為によって自らの価値を証明しなければならないだろう」¹³³⁾。イエーガーなき後のドイツ第三帝国において、彼の周辺の人物もナチ政権を傍観し、無力だったのだろうか。以下、その反証に触れておきたい。1944年7月20日にヒトラー暗殺を企てた、カール・ゲルデラー (Carl Goerdeler) を中心とする国民保守派の集まりに、イエーガーと関係した人物が二人、加わっていた。一人は外交官のウルリヒ・フォン・ハッセル (Ulrich von Hassell)、もう一人は「古代文化協会」の会長を務めたことのあるプロイセンの元財務大臣ヨハネス・ポーピツ (Johannes Popitz) である。ポーピツは、1938年の「水晶の夜」の後ナチ政権に批判的になり、抵抗運動に加わった。1944年7月20日のヒトラー暗殺の試みが失敗に終わった後、ハッセルとポーピツは逮捕され、死刑に処せられた。

ハッセルは自らの有名な日記の中で、『パイディア』第1分冊を読んだことに触れ、同書を「古代と未来への驚くべき洞察と展望を含む」と高く評価している¹³⁴⁾。ポーピツは獄中で『パイディア』第2分冊の差し入れを受け、これを読んでいたことが記録されている¹³⁵⁾。「第三の人文主義」はこの二人による反ナチ運動への参加という「政治的な投入」によって、ある程度、面目を保ったと言えるのかもしれない。

以上の第三章、第四章において考察したように、イエーガーはナチズムに対して協調から距離を経て傍観に至った。かかる揺れ動きは、どの程度イエーガーの思想それ自体に内在していたのだろうか。第四章の結びとして、これを二つの観点から考察する。

第一に、イエーガーとナチズムが本質主義的な思考という、似た思想の構えを備えていたことに注目したい。すなわちイエーガーにおいてはギリシア (中心的な圏域) とその他の (インド、中国など) 文明世界¹³⁶⁾、ナチズムにおいてはアーリアないしはインドゲルマン人種 (ならびにその後裔

133) Snell, B.: a.a.O., S.53.

134) Hassell, Ulrich von: Die Hassell-Tagebücher, 1938-1944. Aufzeichnungen vom Anderen Deutschland, hrsg.v.Klaus Peter Reiss und Friedrich Freiherr Hiller von Gaertringen, Berlin 1988, S.385.

135) Schulz, Gerhard: Johannes Popitz, in: 20. Juli. Portraits des Widerstands, hrsg. v. Rudolf Lill u. Heinrich Oberreuter, Düsseldorf/Wien 1984, S.242. 「(獄中の) ポーピツはトーマス・モアが体現したような人文主義的な厳肅さを何ほどか備えていた。(前略) ポーピツは死が不可避となった時も、快活な心を抱いていた。(中略) 時代を超えて国家の現実的で理想的な形態を救うことが、彼の最も重要な目標だった。」(Nagel, Anne C.: Johannes Popitz (1884-1945). Görings Finanzminister und Verschwörer gegen Hitler. Eine Biographie, Köln/Weimar/Wien 2015, S.192.)

136) Jaeger, W.: Humanismus und Jugendbildung, a.a.O., S.44. Jaeger, W.: Platos Stellung im Aufbau der griechischen

であるドイツ人)とそれ以外の人種は、それぞれ質的に異なるものとして捉えられている。そしてアーリア・インドゲルマン人と古代ギリシア人の(人種を介した)親縁という「北方人種の神話」¹³⁷⁾が立てられることによって、イエーガーのナチズムへの協調は容易になった。本質主義的な思考は、しばしば代用宗教となる。こうした特徴からイエーガーの「第三の人文主義」もナチズムも、同時代人によってニヒリズムの名の下に批判された¹³⁸⁾。しかしイエーガーとナチズムそれぞれが模範とする内容には、精神・知性あるいは身体・性格の形成を重視するかなどの点をめぐって相違が存在し、ここからイエーガーのナチズムへの距離や傍観が説明できる。

第二に、イエーガーとナチズムが模範ないしは模範でないと見なした内容に注目したい。彼とナチズムは、「人間性humanitas」の一面である“ヒューマニズム”に高い価値を置かないあるいは拒否する点で、類似していた。これはイエーガーとナチズム双方による新人文主義、ヴァイマル共和制、共産主義、世界市民主義への批判と重なる。さらにイエーガーとナチズムは、^{アルカイック}前古典期的で野蛮な、しかし生き生きとした古代ギリシア像を再評価する点においても軌を一にしていた。これは、伝統的な「人間性humanitas」の中に含まれていなかった点である。しかしイエーガーとナチズムは、以下の二つの点について立場を異にした。まず^{アルカイック}前古典期の野蛮で生き生きとした一面をイエーガーはギリシア文化の一部と見なしたのに対して、ナチズムはこの面を絶対視した。次に「人間性humanitas」の他の一面である「教養ある人間存在・文明」をイエーガーは高く評価したのに対して、ナチズムはこれに否定的であった。したがって“ヒューマニズム”批判、^{アルカイック}前古典期的な古代ギリシア像の評価からはイエーガーとナチズムの協調、^{アルカイック}前古典期的な古代ギリシア像や「教養ある人間存在・文明」の位置付けからは、イエーガーとナチズムの距離や傍観が帰結したと思われる。

以上で考察したイエーガーによるナチズムへの協調および距離や傍観という両義的な関わりに至る特性は、彼による『パイデア』第1分冊と「哲学的な生の理想の起源と循環について」(1928年)の中に特に表れていると思われる。

まず『パイデア』第1分冊について述べる。ナチズムの古典古代観においては^{アルカイック}前古典期的な古代ギリシア、特にスパルタが理想視され、それ以外のアテナイやアジアの影響の濃いイオニアは一般的に低く扱われた¹³⁹⁾。しかし同書においては、ナチズムにおいて対立的に捉えられた様々な要素

Bildung, a.a.O., S.120. Jaeger, W.: Paideia, Bd.1, ²1936, a.a.O., S.4, 6.

137) Chapoutot, Johann: Der Nationalsozialismus und die Antike, aus dem Französischen von Walther Fekl, Darmstadt 2014, S.63-110, 148-154.

138) Snell, Bruno: Die Entdeckung des Geistes. Studien zur Entstehung des europäischen Denkens bei den Griechen (1946), Hamburg ³1955, S.346. Rauschnig, Hermann: Die Revolution des Nihilismus. Kulisse und Wirklichkeit im Dritten Reich, Zürich 1938.

139) Losemann, Volker: Die Dorier im Deutschland der dreißiger und vierziger Jahre, in: Klio und die Nationalsozialisten.

が、バランスよく叙述されている。すなわちホメロスの英雄叙事詩とそれを揶揄するイオニアの抒情詩、ギリシア本土の剛毅なドーリアとアジア風で優雅なイオニア、スパルタのテュルタイオスとアテナイのソロン、悲劇と喜劇、ソフィストとソクラテス・プラトンなどが、(都市国家への)教育という観点から、それぞれの意義を踏まえて見事に描かれている。古代ギリシアはナチズムが理解したような(ドーリア中心の)「多様性の乏しい統一」ではなく、(後のヨーロッパの母体となる)「多様性の統一」として捉えられている。ここからイエーガーが、歴史主義をナチズムのように無視するのではなく、それを踏まえていたことがわかる。同書はナチズムをも相対化する射程を備えており¹⁴⁰⁾、こうした特質は、『パイデア』第1分冊が第三帝国を超えて長い影響を及ぼすに至った¹⁴¹⁾一因にもなったと思われる。

次に「哲学的な生の理想の起源と循環について」を取り上げる。イエーガーは、イオニアの自然哲学者やいわゆる七賢人が、後世のギリシア人によってある時は世俗に疎い純粋な研究者のタイプ(「観想的な生βίος θεωρητικός」)、ある時は実践的な政治家や立法者(「実践的な生βίος πρακτικός」)として描かれてきたことに注目する¹⁴²⁾。この矛盾をイエーガーは後世のギリシア人が哲学的な生の理想を保ちつつも、「過去の偉大な人物の中に(ある時は観想、ある時は実践といった)自分自身の生の理想の模範と象徴を探し、見出した」¹⁴³⁾ことから説明する。というのも「あらゆる真の歴史は、歴史の形成と歴史上の事実を選択する決定的な起動力を、考察者の働きかける内的な生の中心から受け取る」¹⁴⁴⁾からである。ここでイエーガーは古代ギリシア哲学の歩みを三つの段階に区別し、「解体しつつある歴史的な生の秩序を純粋な理性という哲学体系に基礎付け(プラトン、アリストテレス)、この体系から生まれた理論的な学問を自己目的とし(テオフラストス)、最終的に学問が

Gesammelte Schriften zur Wissenschafts- und Rezeptionsgeschichte, hrsg.v.Claudia Deglau, Patrick Reinard, Kai Ruffing, Wiesbaden 2017, S.110-112.

140) イエーガーは、トゥキディデスによるペロポネソス戦争下のアテナイの混乱の記述をバラフレーズする際、混乱の担い手の形容として通例ナチ黨員を指す「党派の同志Parteigenosse」(Jaeger, W.: *Paideia*, a.a.O., S.474) という用語を使っている。またクセノパネスによる古代オリンピア競技に関する言葉、「なぜなら、たとえボリス市民の中に優れた拳闘士、五種競技や格闘技の勝者がいるとしても、だからといってその都市がすでに優れた法秩序の下にあるわけではないからである」(A.a.O., S.275) という言葉を引いている。これは1936年のベルリン・オリンピックによって国威発揚を目指したナチ政権にとって、自らの正体を窺わせる都合の悪い言葉であったことが想像される。

141) Kipf, Stefan: *Paideia* und die Folgen - Die Bedeutung des Dritten Humanismus für den altsprachlichen Unterricht nach 1945, in: Werner Jaeger: *Wissenschaft, Bildung, Politik*, a.a.O., S.83-109.

142) Jaeger, W.: Ueber Ursprung und Kreislauf des philosophischen Lebensideals, in: *Scripta minora*, Bd. I, a.a.O., S.347f..

143) Jaeger, Werner: Ueber Ursprung und Kreislauf des philosophischen Lebensideals (Auszug), in: *Forschungen und Fortschritte*, Bd.5, 1929, S.77.

144) Jaeger, W.: Ueber Ursprung und Kreislauf des philosophischen Lebensideals, a.a.O., S.393.

生の指導という要求を生に与え返し（ディカイアルコス）、自らに引きこもる」¹⁴⁵⁾ 循環として捉える。イエーガーは、ナチズムや「第三の人文主義」と響き合う「人間の規定を観想よりも行為に見た」ディカイアルコスについて多く説明している¹⁴⁶⁾ 一方、プラトンが「ここアッティカの土壌においてのみ観想的な生と政治的な生を妥協の余地なく和解させる深い意味を備える試みを敢行できた」¹⁴⁷⁾ ことを特筆し、観想的な生の意義を堅持している。前者はナチズムとの協調、後者はナチズムからの距離や傍観と関連したのではないか。ところでイエーガーは「哲学的な生の理想の起源と循環について」において擁護した観想的な生が、彼が自己批判した「美的で文学的で非政治的な人文主義」と似ているのか否か、用意周到にも問わない。注145の引用における「自らに引きこもる」例としてイエーガーは、観想的な生の宗教的な形式における懷疑（アレクサンドリアのフィロンによる僧侶の生活の理想としての『観想的な生』）¹⁴⁸⁾ を挙げている。これはアメリカ合衆国にいた時期におけるイエーガーの「象牙の塔に引きこもった」姿のみならず、彼のキリスト教神学への関心を予示しているかのようで、意味深長である。

第五章 第二次世界大戦後のイエーガーによる著作

第二次世界大戦に第三帝国は敗北した。これに対してイエーガーはどのような態度を取り、その後の彼の研究はどのような展開を遂げ、こうした態度や展開は彼の以前の研究やナチズムとの関わりといかに関連していたのだろうか。本章においてはこれらの問いを、ナチズムの支配や第二次世界大戦後のドイツに関する言明（Ⅰ）、観想的な生に関する見解、キリスト教の教父や神学に関する研究（Ⅱ）、という二つの観点から検討してゆく。

Ⅰ. ナチズムの支配や第二次世界大戦後のドイツに関する言明

同大戦の終了後、しばらくして著された2つの著作から、彼によるナチズムの支配や第二次世界大戦後のドイツに関する見解を窺うことができる。

第一に、1948年イエーガーが教育学者エドゥアルト・シュプランガー（Eduard Spranger）へ宛

145) Jaeger, W.: Ueber Ursprung und Kreislauf des philosophischen Lebensideals (Auszug), a.a.O.. こうした捉え方には、カントによるドイツ観念論の開始からその解体に至る歩みを古代ギリシア哲学史の流れに投影している節がある。

146) Jaeger, W.: Ueber Ursprung und Kreislauf des philosophischen Lebensideals, a.a.O., S.378-390. イェーガーはディカイアルコスの思想がローマのキケロに継承されたことも指摘している（A.a.O., S.392f.）。

147) A.a.O., S.352.

148) A.a.O., S.392.

てた手紙が残されている¹⁴⁹⁾。イエーガーはベルリン大学へ赴任する前後、シュプランガーの知遇を得、親交を結んでいた。この書簡の中でイエーガーは第二次世界大戦後のドイツの国際的な孤立に触れ、世界へ復帰するためにも人文主義的な古典語教育・古典研究が必要であると説く。彼は第一次世界大戦後、同様の状況にあったドイツに同様のことを説いていた¹⁵⁰⁾。イエーガーによれば、「ナチスの教育的な措置は、あらゆることを自らの文化の歴史的な根源（人文主義）から分離し、自らの伝統意識を狭隘で自己満足的なナショナリズムへ制限するため全てを行った」¹⁵¹⁾。ここでイエーガーは、人文主義の価値低下の起源を「ヒトラーの不合理な人種理論」¹⁵²⁾ではなく、ヴィルヘルム体制の中に求める。この体制から、ナチズムの精神が生まれ成長したという。そして人文主義ギムナジウム、そこで育まれる人間性という高い理想をナショナリズム崇拝に対して維持すべきこと、西側の文化共同体の精神的な再建を説く。イエーガーは最後に、「私はこうした（発言への意欲という）自然的な感情にもかかわらず、自らの現在の活動の場所（アメリカ合衆国）からドイツの事柄に介入しないことを自らの原理とした」¹⁵³⁾と述べる。この一節は、(少なくともアメリカ合衆国滞在後の) イェーガーによるナチズムへの傍観を説明する、一つの手掛かりとなっている。

第二に、1960年に刊行された『ベルリン大学史』においてイエーガーは、ベルリン大学古典文献学科の発展について記している。その中には、ナチズムの支配に触れた部分がある。

「ナチズムの政治的な支配は、ベルリンの文献学にとっても重大な帰結がないわけではない闘争へと導いた。すでに述べたとおり、この論文の著者（イエーガー）は、E.クルティウスやヴィラモーヴィッツが担当した講座を放棄し、俊秀の年下の人々や尊敬すべき年上の同僚エドゥアルト・ノルデン教授と同様、外国へ行く決断を迫られた。(中略) 歴史的な運命という野蛮な暴力が、人間文化の歴史においてしばしば起きたように、静かな有機体的な成長の過程を中断させた。」¹⁵⁴⁾

149) Overesch, Manfred: Dokumentation zur deutschen Bildungspolitik nach dem 2. Weltkrieg. Werner Jaegers Brief an Eduard Spranger vom 26. Mai 1948, in: Gymnasium. Zeitschrift für Kultur der Antike und humanistische Bildung, Bd.89, 1982, S.109-121.

150) Jaeger, Werner: Die Antike und das Problem der Internationalität der Geisteswissenschaften, in: InterNationes. Zeitschrift für die kulturellen Beziehungen Deutschlands zum Ausland, Jg.1, Heft 4, 1931, S.91-94.

151) Overesch, M. : a.a.O., S.119.

152) A.a.O., S.120.

153) A.a.O., S.121.

154) Jaeger, Werner: Die klassische Philologie an der Universität Berlin von 1870 - 1945, in: Studium Berolinense. Aufsätze und Beiträge zu Problemen der Wissenschaft und zur Geschichte der Friedrich-Wilhelms-Universität zu Berlin, Berlin 1960, S.484f..

「第三の人文主義」とナチズムの確執が果たして「闘争Konflikt」という名に値するものであったか、問うことができよう。上の引用の最後の文でナチズムの支配は、いわば人為を超えた不可避的な運命として捉えられている。それをどうすれば阻むことができたか、という問いはイエーガーの関心を惹かない。彼はむしろ過去の伝統や課題を継承すべきことを説き、「未来の（ベルリン大学の）文献学は自らの伝統を恥じる必要はない」¹⁵⁵⁾と結んでいる。

以上の二つの言明から、イエーガーは第二次世界大戦前からナチズムを自覚的に傍観したこと、同大戦後ナチズムを批判的に捉えたことなどが窺える。ではナチズムの経験は、彼自らの人文主義観をどのように変えたのだろうか。

II. 観想的な生に関する見解、キリスト教の教父や神学に関する研究

イエーガーは祖国ドイツの敗北を亡命先のアメリカ合衆国で体験した。そこで自らのナチズムへの傍観的な関わりをいわば学問的に正当化し、今後の研究の道筋を示す必要を感じたように思われる。これを表すのが、「ギリシア人と哲学的な生の理想」¹⁵⁶⁾（1947年）および「観想的な生の道徳的価値」¹⁵⁷⁾（1952年）である。この二つの論文は、先に触れた「哲学的な生の理想の起源と循環について」（1928年）と類似したテーマを論じている。しかし叙述の重点が変化している。以下こうした変化を考慮した上で、上の二つの論文を検討する。

イエーガーは「ギリシア人と哲学的な生の理想」において、「存在の考察（観想的な生）が人間による最高の活動の本質内容であるという考えは、ギリシア精神の全ての歴史を貫く」¹⁵⁸⁾と説き、（観想的な生と実践的な生を統合した）プラトンとアリストテレスを相変わらず高く評価する。しかし（実践的な生を重視した）ディカイアルコスについてはほとんど触れず、叙述の重点は次のように変化している。すなわち「哲学的な生の理想の起源と循環について」においては、観想的な生の（実践的な生の重視という変化も含めた）「循環」という運動が説かれた。これに対して「ギリシア人と哲学的な生の理想」においては、様々な変化を貫く（観想的な生の）基底性、歴史的な連続性が強調されている。イエーガーはこうした主張を、古代ギリシアという伝統への回帰によるドイツ復興の希望と結び付ける¹⁵⁹⁾。すなわちペルシア戦争後「アテナイの若い民主主義は、古代ギリ

155) A.a.O., S.485.

156) Jaeger, Werner: Die Griechen und das philosophische Lebensideal, in: Humanistische Reden und Vorträge, a.a.O., S.231.

157) Jaeger, Werner: The Moral Value of the Contemplative Life, in: Moral Principles of Action, ed. by Ruth Nanda Anshen, New York/London 1952. この論文は基本的に注156の論文の英語版だが、加筆修正がかなり施されている。

158) Jaeger, W.: Die Griechen und das philosophische Lebensideal, a.a.O., S.231.

159) Orozco, Teresa: Die Platon-Rezeption in Deutschland um 1933, in: »Die besten Geister der Nation«. Philosophie und Nationalsozialismus, hrsg. v. Ilse Korotin, Wien 1994, S.172-174.

シアの廃墟から指導的な力として身を起こし、次のような原則に基づいて世界の再建を試みる準備ができていた。この原則はアテナイの民主主義に、ギリシア史の最大の危機を勝者として生き延びる能力を与えていた。」¹⁶⁰⁾ (ここでペルシア戦争後のアテナイは、第二次世界大戦後のドイツと重ねられている)、「我々の大学が、本来あるところの人間存在を再生させる力であろうとするならば、観想的な生の理想に場を設けるため出発しなければならない」¹⁶¹⁾。後者に関してイエーガーは、「古代ギリシア思想の世界が、我々の（西暦という）年代算定の初期の世紀に、新しいキリスト教精神への道を示した時、我々は観想的な生という古典的な理想がキリスト教会に吸収され、修道院の生活という形で再生した興味深い光景を目撃している」¹⁶²⁾と指摘する。その結果、古代ギリシア思想がキリスト教の教父や神学の形成に及ぼした影響が第二次世界大戦後のイエーガーの中心的な研究テーマとなる。先ほど、『パイデア』における「人文主義の国家倫理的な機能」（第1分冊）からの「神中心的な転回」（第2、第3分冊）¹⁶³⁾について触れた。かかる転回は観想的な生を媒介として、古代ギリシア思想からの断絶ではなくその継承として正当化されたと考えられる。

引き続きイエーガーによる、新しい研究方向の展開に触れておく。彼によれば、古代ギリシアの遺産つまりプラトン主義とアリストテレス主義は、キリスト教中世の偉大な思想家であるアウグスティヌスとトマスへそれぞれ受け継がれ、キリスト教の教理と融合した¹⁶⁴⁾。コーダー3世によればハーヴァード大学のイエーガーの研究室には、ヴィラモーヴィッツ＝メレンドルフとプロテスタン神学者アドルフ・フォン・ハルナック（Adolf von Harnack）の肖像が掲げられ、イエーガーは自らの中にこの二人が統合されていると考えていたという¹⁶⁵⁾。イエーガーは第一次世界大戦後のドイツにおける新たな研究潮流のように文化と宗教、哲学と神学の相違を強調しなかった。むしろ両者を連続的に捉えた。こうした見解は第二次世界大戦後、ソ連、アメリカ合衆国がそれぞれ占領したドイツの地域の文教政策に対して¹⁶⁶⁾、ドイツ・「ヨーロッパAbendland」の伝統を守る一つの拠り所となった。

イエーガーは『初期キリスト教とギリシアのパイデア』において、キリスト教の重要な概念が古代ギリシア起源であることを指摘した。その例として、^{エクレシア}教会とは元来古代ギリシアのポリスの市

160) Jaeger, W.: Die Griechen und das philosophische Lebensideal, a.a.O., S.225f.

161) A.a.O., S.239.

162) Jaeger, W.: The Moral Value of the Contemplative Life, op.cit., p.92.

163) 注123、124、125を参照。

164) Jaeger, Werner: Humanismus und Theologie, in: Humanistische Reden und Vorträge, a.a.O., S.321.

165) Calder III, W.M.: Men in Their Books, op.cit., p.134.

166) Landfester, Manfred: Geistiger Wiederaufbau Deutschlands durch die humanistische Erinnerungskultur nach 1945, in: Gießener Universitätsblätter, Jg.33, 2000, S.83.

民共同体を意味し¹⁶⁷⁾、メタノイア（悔い改め、転向）という言葉は本来プラトンに由来する¹⁶⁸⁾と主張した。テルトゥリアヌスの先行者は、キリスト教を一種の哲学と見なした¹⁶⁹⁾という。イエーガーは晩年、ニュッサのグレゴリウスの禁欲的生活について論じている。イエーガーはこの禁欲的生活の起源を、すでに触れたようにギリシア人の哲学的な生、観想的な生の中に見出したのであった¹⁷⁰⁾。

結語

本論では、第一章においてイエーガーの出自、経歴、学問上の関心について整理した。第二章においては、1920年代の4つの危機と、それに対するイエーガーとナチズムの対応を検討した。第三章においては、イエーガーによるナチズムへの協調の試みを、1933年の彼の著作と言行を手掛かりに考察した。第四書においては、1934年から1945年にかけてイエーガーとナチズムとの距離、ひいては傍観的な関わりを検討した。第五章においては、第二次世界大戦後のイエーガーによる著作を考察した。これらの検討を通して、イエーガーがナチズムに対して（1933年の短期間を除いて）大勢として傍観的に関わったことが事柄に即して説明できたのではないかと思う。その際、彼の著作の中にナチズムへの（協調や距離への偏差も含めた）傍観を支えた要因を探し求め、彼による観想的な生への関心に逢着した。

イエーガーの学問的な出発点は、アリストテレス『形而上学』（博士論文）とキリスト教の教父に関する論文（教授資格請求論文）であり、これは観想的な生と間接的に関わる研究であった。その後イエーガーは1920年代のドイツの様々な危機に触発され、ベルリン大学教授という立場もあり「第三の人文主義」の中心人物となった。そして人文主義的な古典語教育・古典研究の（観想的な生よりもむしろ）実践的な生への寄与、「政治的な人間の教育」を説く。しかしその時期にあっても「哲学的な生の理想の起源と循環について」の中に示されていたように、観想的な生への関心や評価は、時代を貫いて伏流していたと考えることができる（『パイデア』第1分冊においても「政治的な人間の教育」を説く一方、観想的な生の表れについて詳しく論じ¹⁷¹⁾、ギリシア思想がキリスト教へ連なる道筋¹⁷²⁾がすでに示されていた）。こうした意味で、イエーガーによる（1933年の短期間を除く）ナチズムへの傍観は、彼の一貫した観想的な生の評価に基礎付けられていたと言

167) Jaeger, W.: Early Christianity and Greek Paideia, op.cit, p.15.

168) Op. cit, p.10.

169) Op. cit. p.33.

170) Jaeger, Werner: Die asketisch-mystische Theologie des Gregor von Nyssa, in: Humanistische Reden und Vorträge, a.a.O., S.267f..

171) 特に「哲学的な思考と世界の秩序^{コスモス}の発見」の章。

172) Jaeger, W.: Paideia, Bd.1, a.a.O., S.209.

えよう。彼は自らの「第三の人文主義」がナチズムに少なからぬ脅威として映っていたにもかかわらず、というかまさにそれがゆえに、「政治的な人間の教育」という構想に殉じることはなかった。むしろアメリカ合衆国へ移住し、観想的な生の明示的な評価に基づく研究へシフトしていった。これはイエーガーにとって、観想的な生が（外国への滞在という）逆境にあって避難所¹⁷³⁾として重要であったことを示す。イエーガーによるナチズムへの協調の試みとナチズムによるその拒否は、イエーガーによる学問的な関心が主として「政治的な人間の教育」から（神中心的な転向による）古代ギリシアとキリスト教神学の連続性の証明、観想的な生の明示的な評価へ移るのを、多かれ少なかれ否定的に媒介したと考えることができるだろう。

謝辞：本論文は、平成29年度科学研究費助成金（基盤研究C、課題番号17K02265）による研究成果の一部として公表するものである。本論文を執筆するための資料収集の際、ハーヴァード大学のホートン図書館のお世話になった。この場を借りて、関係者の方に感謝を申し上げる。

173) 「パイデア（教養）は順境にあっては飾りであり、逆境にあっては避難所である。」（Demokrit: Fragmente 180, in: Fragmente der Vorsokratiker, hrsg.v.Hermann Diels u. Walther Kranz, Bd.2, Dublin/Zürich ¹²1967, S.181.）